

民謡同好会



近年凋落傾向にある日本民謡を再度盛上げるべく、これまでの尺八同好会の会員たちが中心となり民謡同好会を結成して今年4月から活動をスタートしました。

民謡をこよなく愛好する人たちが、本格民謡を目指して互いに切磋琢磨し成長するのが会結成の趣旨です。誕生したばかりの会ですが暖かく見守って頂き、皆様のご支援、ご協力を宜しく願います。先ずは当面の目標を、今年の総会で披露目する事を目指して日々精進を重ねて参りたいと思います。

民謡は“心のふるさと”と言われ、日本人の“心に響く”何か訴える力を持っています。それは以下に紹介する【民謡プロ歌手が陥り易いもの】「民謡と流行歌の違い」を理解する事によって、民謡の持つ「素晴らしさ」が一段と深まります。

【民謡プロ歌手が陥り易いもの】

民謡は、「郷土色」・「生活感」・「故郷(くに)の味」の3つが特に大事です。

民謡プロ歌手を例にとると、ややもすると唄そのものは技巧に長けて、綺麗な声で「顧客受けする」唄になりがちです。そこには「郷土色」「生活感」「故郷の味」があまり感じらず、まるで写真を見せ付けられているようで、唄っている最中はとても耳障りが良いのですが、唄い終わったら心に何も残りません。流行歌のように聞こえてしまう民謡、これは民謡の本質から外れてしまった事が原因なのです。

一方地方の民謡家が唄うと、唄そのものは素朴だが、力強さと厳しい労働を感じさせる訛声が、心に何か「ズシン」と響き、唄い終わっても、いつまでも「余韻」として心に残ります。まるで唄の向こうに、その人の生活が滲み出て来る「味わい深い」唄です。これが民謡のもつ「素晴らしさ」なのでしょう。

私たちも、プロ歌手と同様にならないよう「他山の石」にしたいものです。

【民謡と流行歌の違い】

民謡も流行歌も、庶民の歌という点では、全く同じです。民謡愛好者の人たちが、よく用いる言葉に、「あれは綺麗過ぎて、民謡じゃない、流行歌だよ…」と。では、民謡は汚いといいいのかと言うと、これは言葉のあやで、「綺麗」ではなく、「過ぎる」と言うところに意味があります。その過ぎるとは何かと言うと、民謡は「あんな、表面だけ飾った、内容のない、薄っぺらなものではない、もっと味のあるもの」と言った意味です。では「味」とは、どんなものでしょう。それが民謡の「らしさ」なのです。

民謡の多くは、自然を相手にして暮らしてきた人たち（田畑を耕す農民、魚をとる漁師、林業に携わる山村の人）が、生活をかけて親子3代以上にわたって唄い継がれてきた伝統の労作唄です。

その生活が、唄の向こうに感じられないと、先ほどの「綺麗過ぎる」と言う事になります。

例えば、日本の代表的な労作唄として有名な宮崎県の民謡「刈干切り唄」なら、山村の人が山で自分がここの谷で元気で働いている

事を知らせるために、萱(かや)を刈ったり、休んだりしている情景を自然に表現するということです。山村の人ですから、野性的な太い声で、山で唄う。都会の舞台やお座敷での唄のような細かい技巧は捨てて、大きく、強く、唄うのです。

自分がここにいるのを知らせるとなれば、向かいの尾根まで聞こえるようにしなければならぬから、遠くへ届く声で唄わなければなりません。野良着で、汗をかいて、泥まみれになって働いているから、日焼けした、太い、長閑(のどか)な、力強さと厳しい労働を感じさせる声で唄うのです。そうすると、どの節のどの音に力を入れる、この音は力を抜く、ここは押さえる、あそこは長閑に、といった声で組立てが必要になります。それにもう一つ、宮崎県下の高千穂地方の、日向訛りで化粧すれば、「らしさ」が一層出てきます。結局、民謡は、その「らしさ」を表現するために、唄に自分を合わせる事が必要なのです。たとえ、三味線や尺八の伴奏が付いても付かなくても、時代が変わっても・・・。

これが民謡の持つ「素晴らしさ」で、日本人の「心に響く」ものなのです。

【民謡を歌う際の心得】

私たちが民謡を唄う時に、特に注意しなくてはならないのが、前記「郷土色」・「生活感」・「故郷(くに)の味」の3つを常に意識して唄わなければなりません。それには現地民謡を良く理解すると共に、現地民謡を忠実に、正確に唄い上げる事が大事になってきます。

【さいごに】

民謡の素晴らしさを縷々述べてまいりましたが、ぜひ多くの皆さんにもこの素晴らしさを体現して頂きたいと思います。より多くの皆さんの民謡同好会への入会をお待ちしております。



民謡の練習風景

民謡同好会

代表 山形 俊男 (昭和39年機械科卒)

事務局 佐藤 弘 (昭和40年機械科卒)

連絡先 山形 俊男

TEL 045-586-1278

E-mail t_yamagata0602@yahoo.co.jp